

ダーラヤヴァウ (Darayavau-) とアウラ マヅダーフ (Auramazdah-)

惠 谷 俊 之

- 一、序 言
- 二、ダーラヤヴァウ、その統治理念
- 三、アウラマヅダーフ
- 四、結 語

一 序 言

古代西南アジア歴史世界に最終的統一をもたらしたハカ
ーマニシュ (op. Haxāmanīš; gr. Ἀχαιμένης) 朝ヘルシア
帝國の最大の英主と目されるダーラヤヴァウ (op. Darā-
yavau; gr. Δαρείος) 一世(五二一〜四八六 B.C.)を研究対象
にとりあげ、彼の統治理念の追求から始めて、そこにアウ
ラマヅダーフ神の名による支配権の正當づけのあとを——
古代に於ける政治と宗教の相互関係の典形的な一例を——

この王朝の遺した古代ペルシア語碑文史料を用いて、明ら
かにして行こうというのが本稿の課題である。

・ 一体、西南アジア方面の研究は歐米東洋學の最も得意と
するところで、古代ペルシアの研究ももちろん例外である
はすがなく、言語・宗教・歴史・考古の各方面に於いて數
数の優れた業績を誇っている。ダーラヤヴァウについてみ
ても、ドイツの Fr. Spiegel⁽²⁾、イギリスの G. Rawlinson⁽³⁾
アメリカの A.T. Olmstead⁽⁴⁾ に優れた論著があり、ハカ
ーマニシュ朝の宗教問題となると、いわゆる「イラン學者」
と呼ばれる第一級の言語學者達が異常な熱心さをもって前
世紀以來討究を續けて來ていて、ことに L.G. Casartelli⁽⁵⁾
A.V. Williams Jackson⁽⁶⁾ L.H. Gray⁽⁷⁾ H.S. Nyberg⁽⁸⁾ 等

の論考は本問題について参照価値が高い。しかし、卓見の及ぶ限りでは、Spiegel、Olmsteadらの歴史家の論著は單に政治制度・事件の叙述に終り、政治思想についての追究には殆どみるべきものがない。また Nyberg の言語・宗教學者の研究は、ハカーマニシュ朝の帝王がゾロアストラ (av. Zarathuštra) 教徒であったかなかったかを決定することを主眼點として展開されていて、宗教が政治理念に入組んで活動している様相についての究明は充分でなく、なお史學者側からの考察の餘地を残していると考えられる。

二 ダーラヤヴァウ、その統治理念

では早速、課題にとりかかる。彼は具体的にどのような自覺のもとに、またどのような方針のもとに彼の帝國を統治しようとしたのか。最初に、碑文の記述の中からこれを抽出してみよう。

彼は刻文の中で色々の稱號を用いている。最も普通には、「大王」(*xšāyaθiya vazraka*)⁽⁴⁶⁾と「諸王の王」(*xšāyaθiya xšāyaθiyānām*)⁽⁴⁷⁾である。また「諸州の王」(*xšāyaθiya dahyūnām*)⁽⁴⁸⁾と稱つてゐる。今、DB.I.1-3を一例として

示すと、

「我は Dārayavau- 大王、諸王の王、Parsa- に於ける王、諸州の王なり。Vistāspa-(gr. *Ὑστάσπης*) の子、Aršama-(gr. *Ἀρσάμης*) の孫として、Haxāmanis (gr. *Ἀχαιμάνης*) 家に屬す」⁽⁴⁹⁾

と名のつてゐる。「諸王の王」とは、實質的には、彼が「パーサ Parsa-(州)に於ける王」であると同時に、「諸州の王」であることを示したものである。そして、そういう偉大な王は「大王」⁽⁴⁶⁾と呼ばれるのにふさわしいというのであらう。「諸州」とは、ハカーマニシュ帝國内の屬州を指してゐて、その數は DB.I.11-17⁽⁵⁰⁾によると二十三あったが、DNA 15-30 や DSe 14-30 によるとその後更に増加したようである。因にヘーロドトスは二十の太守領 (*εὐνομίαι* op. *xšaça-pāvan*) と若干の邊境羈縻民の存在を傳えている。⁽⁵¹⁾北はコーカサス山脈の麓まで、東はトランス・オキジアナからアフガニスタン・シンド地方に及び、西はエーゲ海のギリシア諸國に接し、南はペルシア本土、アラビア半島、エジプトからリビアの沙漠に至るまでの廣範圍にわたってゐた。

彼はまた「一切人民の王」(xšāyaθiya vispazanānām) (DNa 10-11; DSe 9-10; DZc 5)「この廣くはるかなる大地の王」(xšāyaθiya ahyāyā būmiyā vazrakāyā dūra-ipyi) (DNa 11-12; DSe 10-11)「庶民の唯一の王」(aivam parvūnām xšāyaθiyam acc.) (DNa 6; DSe 6; DSf 4-5)「庶民の唯一の君主」(aivam parvūnām framātāram acc.) (DNa 7; DSe 6-7; DSf 5)とも稱してゐる。全西南アジア世界の全人民の上に君臨する唯一の帝王としての彼の自覺がよくあらわれている。彼は次のようにいつている。

「Dārayavau- 王は語る。《これらの諸州が我に歸服せしめられた。 Auramazdāh- の恩寵により、彼等は我が臣民(badaka-)となりて、我に貢租(bāji-)をもたらせり。我より命ぜられしことをば、彼等夜に晝になさしめらる。》」(DB. I. 17-20)

また、

「Dārayavau- 王は語る。《Auramazdāh- の恩寵により、次の諸州が Pārsa- 以外で我が獲得せしものなり。我は彼等に君臨せり。彼等は我に貢租をもち來れり。彼等は我より命ぜられたることをなせり。我が法令(dāta-)を

彼等遵守せり。》」(DNa 15-22)と。

さて、こうした世界帝國の支配者として自覺するダーラヤウは、その統治にどのような態度をもつてのそんだか。「Dārayavau- 王は語る。《Auramazdāh- の恩寵により我はかかものなり。即ち、正義(rāsta-)の友にして、虚偽(miša-)の友ならず。弱者(skaud-)が強者(tunuvat-)に對して虚偽をなすは我が望むところにあらず。強者が弱者に對して虚偽をなすも我が望むところにあらず。正義こそ我が望むところ、虚偽者たる人は友ならず。……》」(DNb 5-13)

「Dārayavau- 王は語る。我は敵對的(arika-)ならず、虚偽者(draujana-)ならず、惡をなすもの(zūrakara-)にあらず。我もまた我が氏族もしからざりしが故にこそ、Auramazdāh- も他の存在しめます神々も我に庇護をもたらし給えり。我は正義(aršta-)にもとづきて行動せり。弱者にも強者にも我は惡(zūrah-)をなさざりき。……》」(DB. IV 61-6)

ここにいう「強者」「弱者」とはそれぞれ身分權力の強大

なものの、弱小ものを指していると考えられる(Açota王小摩崖法救に出る大身 mahatta小身。彼は常に「正義」にもとづいて行動し、「虚偽者」でなく、「善」をなして「悪」をなさなかつたし、身分權力の大小によらず公正に人を遇したというのである。

「協力をなす人、彼をその協力に應じて我は保護す。害をなす〔人〕、彼をその害に應じて我は罰す。人が害惡をなすは我が望むところにあらざれど、害惡をなすも罰せざるが如きは我が望むところにあらず。……」(DNb 16-21)

「《……我が家族〔ハカーマニシュ家〕と共に働きし人、彼を我よく尊重したり。害したる〔人〕を我責めに責めたり。》Dārayavau-王は語る。《後に王とならん汝は虚偽者 (draujana-) とならん人、或は造惡者 (zūrakara-) とならん〔人〕、そのものの友 (dauštar-) たるべからず。汝責めに責めよ。》」(DB. IV 65-69)

ハカーマニシュ王家の支配に協力的な人物には手厚い保護を加えるが、叛逆的な人物には手厳しい刑罰を加えるのが自分の信条だといっている。實際彼は協力的人物のため

には、例えば、王位真奪者のガウマータ (gaumāta-) の討伐に参加した六人のペルシア人の家族について、自らの後繼者に、

「汝後に王とならん者はこれら〔六〕人の氏族をよく保護せよ。」(24)

と命令しており、また叛逆的人物には、例えば次のような極刑をもつてのぞんでいる。

「Dārayavau-王は語る。《……Fravarti-は捕えられ我がもとに連行されたり。我は彼の鼻と兩耳と舌とを切取れり。また彼の一眼をえぐり取れり。彼は我が宮廷に縛せられ留置されたり。一切の人民は彼を眺めたり。その後、彼を Hagmatāna- (gr. *Arbāraua*; np. *Hama-dan*) に於て柱にはりつけたり。また彼の臣下の主要人物らを Hagmatāna- の城塞中に幽閉せり。》」(25)

これはメディア人フラオルテース (gr. *Φαρόρης* < op. *Fravarti*-) を首領とするメディアの叛亂の鎮定に際してとられた處置である。同様な極刑は叛逆者に對して屢々下された。(26)

彼は人民に次のようにいっている。

「Auramazdāh-の命に従う人よ。この〔國土安穩の祈願〕は汝にとり呪わしく思われるなかれ。正しき道(Da-
ōim rīstām acc.)を離るるなかれ。叛逆するなかれ。」
と人民に叛逆を戒める。彼のいわゆる「正しき道」とは
後に明らかにするように Auramazdāh- 神の道であり、現
實的にはダーラヤヴァウの統治方針を指す。彼は次のよう
にもいっている。

「人が人に對して言えることは、その人が善政の法令
(uradanām hadugām acc.)を履行するまでは、我に信
用されず。人がその能力に應じて行い、或は遂行すれば、
我は以て満され、また我が悦びは大きく、また我は充分
満足す。かくの如きが我が思慮にして、且つ命令なり。」
(DNb 21-28)

以上、彼が主張していることをまとめてみると、——自
分は常に正義にもとづいて行動した。何故なら、何人に對
しても自分は公正であったからである。正義の人、すなわ
ち協力的人物には保護を加え、虚偽の人、すなわち叛逆的
人物には嚴罰を下した。人民に對して要求していることは
正義の王ダーラヤヴァウの統治に服すること、すなわち、

正しい道を離れないことである。能力の大小は問題ではな
い。各人がその力に應じて正しい道の實踐にいそむこと、
それだけで充分である。——ということに盡きようであ
る。實に齒の浮くような甘い御都合主義的な彼の考え方に
我々はむしろ滑稽なものを感じさせられるが、ともあれ、
古代人特有の素朴な、力強い、そして大變論理的なその表
現法は、彼の考えを理解しようとする我々にとっては、大
層都合のよいことといわねばなるまい。

三 アウラマズダーフ

以上の碑文からの抽出作業によつて、彼の統治理念のあ
らかたの特性が理解できたと思う。次に、更に一步進めて
こうした彼の理念をよりよく理解するために、それを支え
て精神的裏づけをなしていると考えられる彼のアウラマズ
ダーフの崇拜に考察を向けることが要請される。碑文にみ
られるアウラマズダーフについての言及を追つて、更に作
業を續けて行こう。

碑文によれば、ダーラヤヴァウはアウラマズダーフの外
にも、神の存在を認めていた。これによつては、DB. IV 60

61に「Auramazdāh-も、他の存在します神(baga)神も、我に庇護をもたらし給えり。」⁸⁵ DB. IV 62-63にも、「この故に Auramazdāh-も、他の存在します神々も、庇護をもたらし給えり。」とあることによって問題は無い。しかし、「他の存在します神々」(anīyaha bagāha tyaiy hatty)が、イランのパンテオン内の他の神々を指すのか、他民族の神々を指すのか、疑問の餘地を残している。それはともかく、アウラマズダーフはそれらの神(baga)神の中にあつて、最高の座を與えられている。DPd 1-3に、「諸神中の最高〔神〕なる大神 Auramazdāh-が Dārayavau-王を創造し給えり。」⁸⁶とあり、また、DSp1や DSf 8-9にも同一の表現がみられる。神界に於てアウラマズダーフが、「大神」(baga vazraka)であり、「諸神中の最高〔神〕」(ma-θišta bagānām)であるのは、地上に於いてダーラヤヴァウが「大王」(xšāyāθiya vazraka)であり、「諸王の王」(xšāyāθiya xšāyāθiyānām)であるのと全く軌を一にしている。彼はこの神の創造活動に言及して、次のようにいつてゐる。

「大神 Auramazdāh- はこの大地を創り給ひしもの、

人間を創り給ひしもの、安福を人間のために創り給ひしもの、庶民の唯一の王として、庶民の唯一の君主として、

Dārayavau-を王となし給ひしものにまします。」⁸⁷ (DNa 1-8)

「Dārayavau- 王は語る。《諸神中の最高〔神〕なる、

Auramazdāh- が我を創造し給えり。斯〔神〕が我を王となし給えり。斯〔神〕が廣大にしてよき馬とよき人間の備れるこの王國(xšaça-)を我に授與し給えり。」⁸⁸ (DSf 8-12)

アウラマズダーフに創造活動を認めるのは、伝統的なイラン宗教の行き方を踏襲したものであるが、自己が帝王として君臨することに正當性をもたすために、巧みにこの神の特性を利用してゐる點に注意したい。

彼はまた、アウラマズダーフの庇護的活動について、

「Dārayavau- 王は語る。《これは Auramazdāh- の恩寵により同一年になししことなり。我、王となりし後、十九の合戦をなせり。Auramazdāh- の恩寵により、我は彼等を殺せり。また九人の王を捕えたり。……》」⁸⁹

(DB. IV 2-7)

のように戦闘に於ける勝利はこの神の庇護・恩寵によつてえられたとする。「Auramazdāh- の恩寵によら」(vašna

Auramazdāh) という句は A.V.V. Jackson の研究によると、ヘリストウィーン碑文だけで三十四回も用いられている。⁸⁸ このアウラマズダーフの庇護は、彼が神にさからわない「正義者」であったから與えられたものだという。

「Dārayavau- 王は語る。『我は敵對的ならず、虚偽者にあらず、惡をなすものにあらざりき。我も我が氏族もしからざりしが故にこそ、Auramazdāh- も他の存在します神々も我に庇護 (upastā-) をもたらし給えり。』」⁸⁹ (DB. IV 61-64)

従って、逆に「正義」にもとづいて行動せず、「虚偽的」振舞いがあると、アウラマズダーフは恐しい破壊者・殺戮者としてそのものにのぞむという。

「Dārayavau- 王は語る。『この碑文或は彫刻を汝 (王の繼承者) 見て、これらを破壊せば、また汝の氏族が存在する限りこれらを保護せざれば、Auramazdāh- は汝に對し殺戮者となり給うべし。また汝の氏族はあることなかるべし。また汝がなさんこと、汝のそれを Auramazdāh- が破壊し給うべし。』」⁹⁰ (DB. IV 76-80)

また反對に、

「この碑文を汝隠くさざれば、人民に語らば、Auramazdāh- は汝に對して友人となり給い、且つ汝の氏族増殖せん。且つ汝長命を保ちえん。」⁹¹ (DB. IV 54-56)

ということにもなる。アウラマズダーフの運命神としての性格を利用したものである。同様に、異民族が彼に征服されるに至ったのは、彼らがアウラマズダーフを信仰していなかったからだと説明する。サカ (Saka-) 塞族が征服された理由を次のようにいっている。

「Dārayavau- 王は語る。『このサカ (Saka-) 族は敵對的なりき。而して Auramazdāh- は彼らによりて崇められざりき。……』」⁹² (DB. V 30-32)

ダーラヤヴァウはあたかも自家の祖靈に對するようにな守護を祈願している。

「Dārayavau- 王は語る。『このなされたることのすべしは、Auramazdāh- の恩寵によりて我なせり。Auramazdāh- は我が仕事をなすとぐるまで我に庇護をもたらし給えり。我を Auramazdāh- が危害より守り給え。また我が家族をまたこの州を「守り給え」。これを我は Auramazdāh- に祈願せり。これを我に Auramazdāh- が授

け給え。Auramazdāh. の命に従う人よ、これは汝にとり呪わしく思われるなかれ。正しき道を離るるなかれ。叛逆するなかれ。》⁵¹ (DNa 47-60)

「Dārayavau. 王は語る。《我に Auramazdāh. が氏族諸神と共に (vīdaiβis bagaiβis) ^{〔補註〕} 庇護をもたらし給え。

而してこの國を〔敵〕軍より、饑饉より、ハ虚偽〈(drauga-) (＝叛逆)より守護し給え。この國に〔敵〕軍も饑饉もハ虚偽も来るなかれ。これを恩澤として、Auramazdāh. 並びに氏族諸神に祈願せり。この恩澤を Auramazdāh. が、氏族諸神と共に我に授與し給え。》」(DPd 12-24)

以上みて来たところによって、ダーラヤヴァウが信じたアウラマズダーフが何ものであったか、現實にどのような機能を發揮したかが、明らかにになったと思う。ダーラヤヴァウの支配を正當化し、安定化し、守護するのが彼によって期待された使命であったことが理解されよう。

四 結 語

以上の簡単な調査から、結論をひき出すと、次のようになる。

①ダーラヤヴァウは、「諸王の王」(xšāyatiya xšāyatiyānam)として彼の世界帝國に君臨する。②彼は「正義」(aršta; rāsta)にもとづいて統治を行ひ、「虚偽」(drauga-)をにくんで容赦しない。③アウラマズダーフは諸神の最高「神」(maθišta bagānam)として天上に君臨する。④この神が國土(xšaça-)を創造し、ハカーマニシュ家のダーラヤヴァウの統治に委ねた。⑤アウラマズダーフは「正義」の神であり、その庇護をうけるダーラヤヴァウは「正義」の王である。⑥人民はすべからく「正義」の王ダーラヤヴァウの統治に服すべきである。という彼一流の論理の展開が眺められた。これがダーラヤヴァウの統治に於ける政治・宗教的理念であつた。

ペルセポリス宮殿遺蹟、會議室脇壁面には、諸州の人民が、頭上に王座を捧持し、着座しているダーラヤヴァウの頭上に、更にアウラマズダーフが浮んでいるという構圖の彫刻がみられる。それはいわば、ハカーマニシュ帝國の垂直的構造断面圖であり、彼の國家觀を圖式的に表したものと見て興味をさそう。彼にとつては國家は神と帝王と人民の三者によつて構成されるべきものであつたのである。そし

て、これは西南アジア古代の諸王朝に通じてみられる現象であり、ヘカーマニシ朝の古代的性格を端的に示している。

註

- (1) ヘカーマニシ朝の碑文に登場するイラン語は言語學者によつて「古代ペルシア語」(Old Persian; Altpersisch; Vieux Perse)の名で呼ばれ、印歐語のアーリア語派に歸屬するイラン語群中でも、南西方言の系統に分類される。イランの南西部古代ペールサ(Parsa)の地に行われた方言であるところから、「ペールサ語」の呼稱を用いる學者もある。

この王朝の碑文は殆ど三ヶ國語、すなわち、古代ペルシア語、エラム語、アッカド語で書かれている。後二者は前者に翻譯文として添附されたものである。極く一部、アラム語やヒエログリフ・エジプト語で記されたものもある。文字は楔形で、これの解讀がメソポタミア楔形文字學の成立の發端となつたことはあまりにも有名である。書寫材料は岩石、石柱、金屬板、金屬器等種々である。碑文は現在までに、上はアリヤラムナ(Ariyārmna; gr. Ἀριεργύνης)から、下はアルタクシヤッサ(Artaxšaça; gr. Ἀρταξέρξης)三世に至る範圍のものが發見されている。碑文テキストの極く一部が初めて公刊された一七一年以來、G.F. Grotefend や H.C. Rawlinson らの解讀への努力をへて、今日ではテキストは殆ど完全に近い状態にまで整備されている。次に從來出版された主なテキストの文献目録を掲げよう。

H.C. Rawlinson; JRAS vol. 10 pp. 187-349, 1847.

Theodor Benfey; Die persischen Keilinschriften, mit Übersetzung und Glossar. Leipzig, 1847.

J. Oppert; Les Inscriptions des Achéménides. Paris, 1851.
Fr. Spiegel; Die altpersischen Keilinschriften. Leipzig, 1862; II Auflage 1881.

C. Kossowicz; Inscriptiones Paleo-persicae Achaemenidarum quot hucusque repertae sunt. Petropolis, 1872.

F.H. Weissbach und W. Bang; Die altpersischen Keilinschriften. Leipzig, fasc. 1, 1893; fasc. 2, 1908.

H.C. Tolman; Ancient Persian Lexicon and Texts. Nashville, 1908.

H.C. Tolman; Cuneiform Supplement to the preceding. Nashville, 1910.

F.W. Weissbach; Die Keilinschriften der Achämeniden. Leipzig, 1911.

V. Scheil; Inscriptions des Achéménides à Suse. (Mémoires de la Mission Archéologique de Perse, tome xxi) Paris, 1929.

J.M. Unvala; The ancient Persian Inscriptions of the Achaemenides found at Susa. Paris, 1929.

E. Herzfeld; A new Inscription of Xerxes from Persepolis. (Chicago Univ. Oriental Institute Series No. 5), Chicago, 1932.

V. Scheil; Inscriptions des Achéménides. (Mémoires de la Mission Archéologique de Perse, tome xxiv). Paris,

1933.

E. Herzfeld; *Altpersische Inschriften*. Berlin 1938.R.G. Kent; *Old Persian, Grammar, Texts. Lexicon*.

(American Oriental Series vol. 33). New Heaven, Connecticut, 1950.

これらの中、Kent の著したテキストは、最新の研究成果を採入れており、また従来断片的に發表されることが多かった各碑文を一まとめにして採録しているなどの特徴があり、今日の我々が最もよるべきものと考えられる。本稿で使したテキストはすべてこの書によつた。

次に、ダーイアフヴァー一世に關係する碑文テキストの細目を掲げる。略號で示す。表示法は Kent; OP. cit. によつた。

DB;

DPa; DPb; DPc; DPd; DPe; DPf & g; DPh; DPi;

DNa; DNb;

DSa; DSb; DSc; DSd; DSe; DSf; DSg; DSh; DSi;

DSj; DSk; DSl; DSm; DSn; DSo; DSP; DSq; DSR;

DSs; DSt; DSu,v,w; DSy;

DZa; DZb; DZc;

DE;

DH;

Wa; Wb; Wc;

SDa; SDb;

但し D=Darius

S=seal (SDa.b のみ)

B=Behistun

Z=Suez

P=Persepolis

E=Elvend

N=Naqsh-i-Rustan

H=Hamadan

S=Susa

W=weight (段線半分銅)

〔例〕DPa=Darius. Persepolis 發見、a 文

DSb=Darius. Susa 發見、b 文

なお、古代ペルシア語については、R.G. Kent; OP. cit. の外、A. Meillet; *Grammaire du Vieux Perse*. 1915. Chr. Bartholomae; *Awestasprache und Altpersisch*. (Grundriß der Iranischen Philologie, herausgegeben von W. Geiger und E. Kuhn. Strassburg, 1895-1901. Bd. I, s. 249 f.) など参照。碑文の發見、解讀の過程については F.H. Weissbach; *Die Altpersischen Inschriften*. (Grund. der Iran. Phil. Strassburg, 1896-1904. Bd. II) s. 64 f. 及び R.G. Kent; OP. cit, §§ 15-16 参照。

③ Fr. Spiegel; *Die Regierung des Darius nach dem Keilinschriften*. (Érân. Berlin, 1863)

④ G. Rawlinson; *The Five Great Monarchies of the Ancient Eastern World*. London, 1873. vol. III, p. 841 f. *The Fifth Monarchy*.

⑤ A.T. Olmstead; *The History of Persian Empire (Achaemenid Period)*. Chicago, 1948. p. 107 f.

本書は最新のヘカマーニシエ朝史概説書。著者はシカゴ大學東洋研究所教授。本書の出版の日をまたずに物故された。(出版序文)

- ⑧ L.C. Casartelli; La Religion des Rois Achéménides d'après leurs Inscriptions. (Compte-rendu du 3me Congrès Scientifique international des Catholiques tenu à Bruxelles, Septembre 1894, — Bruxelles, 1895).

米屋。ふふ。 A.V. Williams Jackson の大撰論文はこれをふまえて書かれている。

- ⑨ A.V. Williams Jackson; The Religion of the Achaemenian Kings. First Series. The Religion according to the Inscriptions. (JAOS vol. 21, 2nd half, 1901)

- ⑩ L.H. Gray; The Religion of the Achaemenians according to their Non-Iranian Inscriptions. (ibid.)

- ⑪ H.S. Nyberg; Die Religionen des alten Iran. Leipzig, 1938. (deutsch von H.H. Schaeder) s. 343 f.

- ⑫ ベカーマニシエ王朝の帝王がゾロアスター教徒であつたか、なかつたかの問題はイラン宗教の研究者の間に前世紀以來熱心に討議されて來たが、今日未だ完全に意見の一致をみているといえない状態にある。H.S. Nyberg; Op. cit. s. 355-6 によれば、ゾロアスター教徒であつたこととするに否定的立場をとる學者に、de Harlez, Spiegel, Darmesteter, Moulton, Moore, Prašek, Christensen, Meillet, Benveniste, Nyberg などがあつて、肯定的立場をとる學者に、Tiele, Orelli, Nöldke, E. Meyer, Geldner, C. Clemen, Justi, Lehmann-Haupt, J. Hertel, E. Herzfeld, H. Hartmann がある。

我國では、足利博士、伊藤博士共に否定的立場をとられるようである。

- ⑬ xšāyaθiya vazraka の編號は DB. I.; DBa 1; DPa 2; DPb; DPe 1-2; DPh 1; DNa 8-9; DSa 1; DSb 2-3; DSc; DSd 1°; DSe 8°; DSf 6; DSg 1°; DSi 1°; DSj 1; DSk 1; DSm 1; DSp 1°; DSy 1; DZb 1; DZc 5; DE 12-13; DH 1; Wa 3-5; Wb 2; Wc 2-3; Wd 3 にみられる。(末尾の肩に附した○印は、原文が破損しているが再構成して讀んだことを示す記號。従つて、やや不確實。)

- ⑭ xšāyaθiya xšāyānām は DB, I 1-2; DBa 1; DPe 2-3; DPh 1; DNa 9; DSa 1-2; DSb 3-5; DSd 1; DSf 6; DSg 1°; DSi 1°; DSj 1°; DSk 1-2; DSm 1°; DSy 1; DZb 2°; DZc 5; DE 13-14; DH 1; Wb 3-4; Wc 3-5; Wd 4-5 にみられる。

- ⑮ xšāyaθiya dahyūnām は DB, I 2°; DBa 2-3; DPa 3-4; DPe 3; DNa 10; DSb 5-7; DSe 9°; DZb 2-3°; DZc 5; DE 14-15; Wb 4-5; Wc 5-6; Wd 5-6; DPh 1-2; DH 1-2; DSa 2; DSd 1; DSf 6; DSg 1°; DSi 1°; DSk 2; DSm 2°; DSy 2 にみられる。

- ⑯ 「1. adam Dārayavauš xšāyaθiya vazraka xšāyaθi[ya xšāya]θiy- 2. ānām xšāyaθiya Pārsaiy xšāyaθiya dah-[yūnām] Višt- 3. āspahyā puça Arsāmahyā napā Haxāmaniš[iya]

- ⑰ 現在までに発見されている碑文によると、「大王」(xšāyaθiya vazraka) と名のつてゐるのは、ダーリヤヴァウシュ以前のカーマニシエ王では、クルー (Kūru-; gr. Kōpos) 11世 (CMb, CMc.) のみである。

(45) DB, I 11-17

「Dārayavau- 王は語る。《Auramazdāh- の恩寵により、我は王たり。 Auramazdāh- は我に王國を授與し給えり。》 Dārayavau- 王は語る。《次の諸州が我に歸屬せり。 Auramazdāh- の恩寵により、我は彼等の王たり。 Persia (Pārsa-)’ Susiana (Ūvja-)’ Babylonian (Bābiru-)’ Assyria (Aθurā-)’, Arabia (Arabāya-)’ Egypt (Mudrāya-)’ 沿海諸國’ Sardes (Sparda-)’ Ionia (Yauna-)’ Media (Māda-)’ Armenia (Armina-)’ Cappadocia (Katpatuka-)’ Parthia (Parθava-)’ Drangiana (Zraka-)’ Herat (Haraiva-)’ Chorasmia (Uvārazmi-)’ Bactria (Bāxtri-)’ Sogdiana (Suguda-)’ Gandara (Gadāra-)’ Scythia (Saka-)’ Sattagidia (Ṡatagu-)’ Arachosia (Hara-uvati-)’ Maka (Maka-)’ 合計11十三州なり。》」

(46) DNa 15-30 と DSe 14-30 では配列順序に多少の異同があるが、掲げられている州名は幾りなり。 DB, I 11-17 に比べてみれば、 Sind (Hidu-)’ Libyan (Putāya-)’ Carian (karka-)’ Ethiopian (Kūsiya-) が新に追加され、 Scythia (Saka-) は Saka haumavarga (haumavarga- の語解は不明。 Kent は ‘hauma [＜skt.sōma]-drinking’ または ‘hauma-preparing’ とし「麻酔薬」としている。) と Saka tigraxauda (尖頭帽の Saka- の意) と Saka tyaiy paradraya (海のかみなどの Saka- の意) の三部にのみなされ、 Ionia (Yauna-) が単なる Yauna- と Yauna takabara (Petasos 甲を着用する Yauna- の意) の二部に分かたれているのに氣附く。

(47) クーロフトス III 89-97’ 特に 89°

(48) 17. 0ātiy

18. Dārayavauš xšāyaθiya imā dahyāva tyā manā pati-
[yāiša] vašnā Au-
19. ramazdāha manā badakā āhatā manā bājim abaratā
[tya]šām hacamā
20. aθahya xšapavā raucapativā ava akunavayatā

(49) 15. 0ātiy Dārayavauš xš[ā]ya-

16. θiya vašnā Auramazdāhā im[ā]-
17. dahyāva tyā adam agarbāya[m]
18. apataram hacā Pārsā adamšā[m]
19. patiyaxšayaīy manā bājim aba[ra]-
20. ha tyāšām hacāma aθahya ava[a]-
21. kunava dātām tyā manā avadi[š]
22. adāraiya

(50) 5. 0ātiy Dārayavauš xšā-

6. °θiya vašnā Auramazdāhā avākaram a-
7. miy tyā rāstam dau[št]ā amiy miθa na-
8. iy dauštā amiy na [imā] kāma tyā skauθ-
9. iš tunuvatahyā rā°diy miθa kariyaiš
10. naimā ava kāma tyā t[u]nuvā skauθaiš r-
11. ādiy miθa kariydiš tyā rāstam ava mām
12. kāma martiyam draujanam naiy daušt[ā] am-
13. iy……」

(51) 61. 0ātiy Dārayavau-

62. š xšāyaθiya avah[yarādiy]Auramazdā upastām abara

utã ani-

63. yāha bagāha tyai[y hatiy ya⁰] ā naiy ari[ka] āham
naiy draujinna āham na-

64. iy zūrakāra āham [naiy a]da[m na]imaiy taumā
upariy arštām upariy-

65. ā[ya]m naiy skaurim^{*} naiy t[u]nuvatam zūra akuna-
vam |

* skaurim 𐰇 skauθim 𐰇 𐰇𐰇𐰇𐰇 (R.G. Kent; Op. cit. p. 209)

¶ 16. martiya hya hataxšataiy anudim [ha]karta°

17. hyā avaθādim paribarāmiy hya v°

18. ināḥayatiy anudim vinastah[yā] [ava]0-

19. ā parsāmiy naimā kāma tya mar^otiya

20. vināṭayaiṣ naipatimā ava kāma yadi-

21. y vināṭayaiś naiy fraṭiyaiś.....

¶ 65.martiya hya hamata-

66. xšatā manā viθi[yā][a]vam ubartam a[bar]jam hya
vivanā[θa]va avam ufrasta-

67. m aparsam ōatīy Dārayavuš xšāyaθiya tuvaṃ[kā]
xšāyaθiya

68. hya aparam āhy marti[ya] [hya] draujana ahatiy
hyavā [zū]rakara ahāt-

69. iy avaiy mā dauštā [biy] ā ufraštādiy parsā

२४ १८७. *tuvam[ka] xśāya[0]iya hya aparam āhy tyām
imaisām martiyā[nā]-*

88. m taumām [ubart]ām par[ibr]ā

᳚ 70. θātiy Dāirayavauš x-

71. šāya 0iya.....

73.Fravartiš āgarbi[ta] anayatā abiy mām ada-

74. mśai[y] utā nāham utā gauṣā utā h^azānam frājanam
utāśa-

75. iy [I caša]m avajam duvaryāmaiṃ basta adāriyā
haruvašim k-

76. āra avaina pasāvaṣim Hagmatānaiy uzmayāpatiy
akunavam

77. utā ma[r]tiyā tyaišaiy frataṁā anušiṁā āhatā avaiy
Ha-

78. gmatā [naiy ata]r didām frāhajam |

例サガルティア (op. Asagartiya-) 人 Çiçataxma- によるサガルティアの叛乱の場合 (DB, II 78-91)*、ペルシア (op. Pārsa-) 人 Vahyazdata- によるペルシアの叛乱の場合 (DB, II 21-53) をその例としてあげらる。

𐬨 𐬨56. martiyā hyā Auramazdāh-

57. ā framānā hauvtaiy gas-

58. tā mā 0adaya pa0im

59. tyām rāstām mā

60. avarada mā stabava |

ᱠᱚᱢᱚᱱ 21. martiya

22. tya pat^oiy martiyam 0ātiy ava mām

23. naiy varnavataiy yātā uradanām hadu-

24. gām āxšnautiymartiya tya kuṇau-

25. tiy yad°ivā ābaratiy anuv tauman-
 26. išaiy xšnuta °°amiy utā mām vas-
 27. iy kāma utā uxš[na]us amiy avākaram
 28. camaiy °ušiy u[tā] framānā」
- ⌘ 「60. Auramazdāmai upas-
 61. tām abara utā an[iyāha ba]gāha tyaiy hatiy」
- ⌘ 「62. avah[yarādiy] Auramazdā upastām abara utā ani-
 63. yāha bagāha tyai[y hatiy]………」
- ⌘ 「1. Auramazdā vazraka hya maōišta bag-
 2. ānām hauv Dārayavaum xšāyaθi-
 3. yam adadā」
- ⌘ 「1. бага vazraka Auramazdā hya im-
 2. ām būmin adā hya avam asm-
 3. ānam adā hya martiyam adā h-
 4. ya šiyātim adā martiyahyā
 5. hya Dārayavaum xšāyaθiyam ak-
 6. unauš aivam parūvnām xšāyaθ-
 7. iyam aivam parūvnām framātā-
 8. ram」
- ⌘ 「8. 0ātiy Dārāyavauš XŠ Auramazdā
 9. [hya] maōišta bagānām hauv mām adā ha-
 10. [uv] mām XŠyam aknauš haumaiy ima xša-
 11. [çam] frābara tya vazrakam tya uva[spa]m uma-
 12. [rti]yam」
- ⌘ Yasna 44,7 ; Yasna 51,7 𐬵𐬀𐬎𐬎𐬀𐬎 Ahurah- Mazdāh-

○ 𐬵𐬀𐬎𐬎𐬀𐬎

- ⌘ 「2. 0ātiy D-
 3. ārayavauš xš[āyaθi]ya ima tya adam akuna-
 4. vam vašnā Aura[mazd]āha hamahyāyā θar-
 5. da pasāva yaθā x[šāyaθi]ya] abavam XIX hamaran-
 6. ā akunavam vašn[ā Aura]mazdāha adamšim a-
 7. janam utā IX xš[āyaθi]yā agarbāyam………」
- ⌘ A.V. Williams Jackson ; Op. cit. p. 163.
- ⌘ 「61. 0ātiy Dārāyavau-
 62. š xšāyaθiya avah[yarādiy]Auramazdā upastām abara
 utā ani-
 63. yāha bagāha tyai[y hatiy yaθ]ā naiy arika āham naiy |
 draujana āham na- 𐬵𐬀𐬎𐬎𐬀𐬎
 64. iy zūrakara āham[naiy a]da[m na]iymai taumā」 |
- ⌘ 「76. 0ātiy Dārāyavauš xša-
 77. yaθiya yadiy im[ā]m dipim imaivā patikarā vaināhy
 vikanā°disiš ut-
 78. ātaiy yāvā tau[mā ahati]y naijydis paribarāhy
 Auramazdātaiy jatā b-
 78. iyā utātaiy taum[ā mā biyā] utā tya kunavāhy
 avataiy Auramazd-
 80. ā nikatuv」
- ⌘ 「54. yadi imām
 55. hadugām naiy [a]pa[gau]da[yāh]y kārāhyā 0āhiy
 Auramazdā θuvām

56. dauštā biyā utā[ta]iy taumā vasiy biyā utā dargam
jivā………」

㉔ 「30. [θāti]y Dārayavauš xšāya-

31. θi[ya avaiy] Sakā [arikā āha u]tā naiy Auramazd-

32. ā [šām aya]di[ya]………」

㉕ 「47. θātiy Dā-

48. rayavauš xšāyaθiya aita tya karta-

49. m ava visam vašnā Auramazdāhā ak-

50. unavam Auramazdā maiy upastām aba-

51. ra yātā kartam akuna[vam mā]m A-

52. uramazdā pātuv hacā ga[stā] utāma-

53. iy viθam utā imām dahyāum aita ada-

54. m Auramazdām jadiyāmiy aitama-

55. iy Auramazdā dadātuv

56. martiyā nyā Auramazdāh-

57. ā framānā hauvtaiy gas-

58. tā mā θadaya paθim

59. tyām rāstām mā

60. avarada mā stabavā」

㉖ 「12. θātiy Dārayavauš xšāya-

13. θiya manā Auramazdā upastām

14. baratuv hadā viθaibiš bagai-

15. biš utā imām dahyāum Aura-

16. mazdā pātuv hacā haināy-

17. ā hacā dušiyārā hacā dra-

18. ugā abiy imām dahyāum mā-

19. ājamiyā mā hainā mā duš-

20. iyāram mā drauga aita adam

21. yānam jadiyāmiy Auramazd-

22. ām hadā viθaibiš bagaibiš a-

23. i[tamaiy] y[ānam Au]ramazdā dadāt-

24. u[v hadā vi]θa[i]biš bagaibiš」

〔補註〕 L.H. Gray は viθaibiš bagaibiš をアッカド語、ヒラヤ
語に於いて viθa- < vis(s)a- < vispa- と解し、 “with all
gods” と譯すべきことを提唱した (L.H. Gray; Op. cit. pp.
181-182) が、一般の賛成を得ていないようである。Kent; Op.
cit. p. 208. はその可能性を認めながらも、従來の説に従つて
いる。自分は暫く、従來通りの解釋をとることにした。問題の
あるところである。

* viθa-/av. visya-/ skt. viçyā < viç < √viç

本稿は、筆者が昨年十一月提出した修士課程研究報告の一部で
ある。本稿の作製にあたっては、梵語英文学研究室の足利・伊藤
兩先生に古代インド・イラン語言語史料の取扱について、親し
く御指導を賜った。ここに記して、感謝の意を表する。

The “Clerk” System in the Early Days of Yüan (元)

Takeshi Katsufuji

The examination system ceased to exist during a period of about eighty years in the early period of the Yüan dynasty, following the destruction of Chin (金). This led the traditional literati to look for patronage of the military for promotion from the status of a “clerk” to that of an “official”, while some of them were inclined to devote themselves to literary activities instead of entering government service under the Mongols.

Darayavau and Auramazdāh

Toshiyuki Etani

The present paper is a study of Dārayavau- I, a great ruler of ancient Persia under the Haxāmaniš dynasty, which succeeded in establishing the last unification in ancient southwestern Asia. The study is intended to clarify the political ideas resulting from the belief in Auramazdāh- in the light of inscriptions in Old Persian, explaining the mental and spiritual basis of this ancient empire and finding a typical example therein of interrelations between politics and religion.

The Installation System under the Ch'ing (清) Dynasty

Hideki Kondo

Monthly installation was in practice until the end of the K'anghsi (康熙) era, regulating the promotion of those Government officials who passed examinations, but the system did not work very well to choose competent personnel and to evade inefficiency in local administration. With a view